



巻頭言

自然の力と科学技術を謙虚に見直そう

Let us humbly re-examine nature's power and science and technology



佐藤年緒 Toshio SATO

科学技術振興機構「Science Window」編集長・科学技術ジャーナリスト会議副会長・日本水フォーラム理事

3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波、そして福島第一原子力発電所事故。同月27日現在、2万7千人を越すと数えられる死者・行方不明者、約19万7千人の住民避難者、そして野菜や水の放射能汚染に不安が広がっている。戦後最大の「国難」と形容されるが、私たち科学や技術に携わる者、それを一般社会に伝える者、さらにはこの技術社会に依拠して生きている一市民として、これまでの自然や科学技術に対する考え方を根底から揺さぶる災害だと受け止め、これから多くの人と力を合わせて、一步一步確かな復興と社会の再構築が迫られているように思う。

地震発生の一週間後に日本学術会議（金澤一郎会長）が「緊急集会」を開いたのも、そんな危機感からだった。呼び掛け文には、今回の災害は自然の力の強さを見せつけ、科学・技術の力の限界をあらためて認識させる結果となった、また原子力発電所からの放射性物質の漏出は科学者に大きな課題を残したとして、「今、我々にできることは何か？」と研究者に問い掛けていた。

この災害から何を学ぶか。まだ原発事故の対応が進行形で、避難住民の救援に力を注ぐ段階だけに早計に判断できないが、「想定外」だったとされる今回の津波の規模やその力を本当に予想していなかったのか、原発の設計でも考慮していなかったのかを検証したい。2004年のインド洋沖大津波でインドネシアのスマトラ島北部では高さが34メートルまで達したと、当時現地調査をした東大地震研究所の都司嘉宣さんの話を聞いて「人が助からない自然現象」に愕然とした記憶があるが、今回も同様に現在の技術では防ぐことができない自然の力を再認識した。その事実を受容するかどうかで、今後の対応策や技術の適用の仕方が異なるだろう。

放射性物質の漏えいと拡散、水道水への汚染と人体影響、さらには避難すべき範囲の設定などに関して、政府や東京電力の発表の仕方と内容に国民の不満が多かった。用語の理解に発表者と国民との距離があったようだ。発表者はメディアに対する記者会見を行っているのか、国民に直接発信しているのか、それによって当然、表現や用語の使い方は異なり、国民からはわかりやすい平易な言葉が要求されるだろう。つまり科学を伝える側と国民との間に立つジャーナリズムや解説者、科学コミュニケーターの力量が問われている。

大人が科学的な素養を持つことで、生きていく上で自ら判断できるための「科学リテラシー」を向上させ、理科教育に苦手意識を持つ学校の先生にも自然や科学に対する興味を持ってもらいたいと願って、私は『Science Window（サイエンス・ウインドウ）』を発行・編集している。「科学と社会の間の窓を開けたい」がモットー。花粉や「見えない放射線」の降下に脅えることなく、「風薫る五月」には本来の爽やかな大気を吸い込みたい。そんな気持ちとともに、科学技術関係者と国民との間の風通しをよくしたいと願っている。

英訳版は422ページをご参照下さい。English version, see pp 422.

© 2011 The Chemical Society of Japan